あふひ

六

秋を名とをり

[V. 9]

PL788
.4
.G4
1654
vol. 9
copy 1
Asian
Japan
Cage

2004551302

世中かたりて 後のちの源心 よろづ抱うくおぼされ 源大将任ぜらる の
やむごとなきもそふまや。かかぐ志きれしのび
ありこさもいくましうて。こくもりしこも。おぼしか
なきれなげき給かされ給むくひまや。私をこれまつ 若つか
なきさ人の御心をつきをずのこおぼしなげく。今ハ
桐つかの御門院はなせ給ゆへ若つか御母はそひ給とこ
ましてひまるくらく人のやうにてそひおりします
を。今名ハこころやましうおぼしまや。うちまのこさ
いまざき記弘徽殿を皇太后と申し慈和気也
ふしひ人ハ立なりしぶ人なりう心やしげなりおり 院
ふしまたがひてハ御あそびなどをこれましう。
世のひぐくぐらりをさせまつく。今の御有様しも
めでたしらぶ 豊家をぞいと悪しうおもひきこえ
とうぐう 冷泉院なりと こひ

給はうしろこれなさ給うしろめこうしひこさえて
大将の君まよろげこさえしつけ給もうこいらいこさ
抱うこうれしとおぼしまことやかれ六条の御息所
の御ところのお坊の姫宮藤宮まゐまひましけば大将
の御こころぞへもいとこれもしげなさ給うくおされ
さ御何りさ海のうしろめこさまことつけてくぐり
やしれましとうねてよりおぼしかり院まもかろ
ことなんとさこしめして古宮のいとやんごとなく
おぼしとさめしまひしもれをうかぐしう
そしなべこうさ海まもてなすなるがいとおしさ
こと藤宮をもこれこそこちのつらまなん思へば

いげうさまつけてもさろうるらざらんこそよからめ。
心のまさひまゐをてうくすきわざするもいやく
世のもどきおひぬべきことなりなど。れ(ミ)ゑ(けしさ)あし
それバ。ゆ(源)がれこちまもげまとせひまゐるれバうしこ
まりてさふらひぬふ。人(院付)のこめとぢがまゐしきこと
なくいづれをもなぐらうまもてなして。女(そんな)のうら
ミかおひそとのこ夜ハするま。ゆ(源ん)しうらぬ心のおほけ
なき儀きろしめしつけこらん時とおそろしそれ
ぞうしこまりてまゐでぬめ。又かく院(ぬん)まもきろしめ
しのこ夜ハするま。人のれ(な)もわがこめもすきがまゐし
ういとおしきまいとぐやむごとなく。心ぐるしき

すぢにはしひさてしまへどまぐあらわれてハわざと
もてなし罕(きこ)しまかず女(は島西古九源氏廿一)もまげなきは年(とし)の程(ほど)を
そげかしうおぼして心とけ給はぬ氣(け)多(しき)なれバそれに
けこころさ海にもてなして院(ゐん)にもきこしめし
いれ世中の人もしらぬなくなりにたる後ふかう
しもあらぬはこころのほど後いらじうおぼし
なげきそりがたくと後さて給にもあきがたの
姫(ひめ)君(ぎこ)はいかで人にまじとふうおぼをば、そうるさき
海なりしはかへりなどもおさくなし、さりとて
人にくさしこるくハもてなし給はぬは氣多を
君(源)も程(なを)ことなりとおぼしわたる大殿(おほとの)(蔡上ん)にはかくのミ

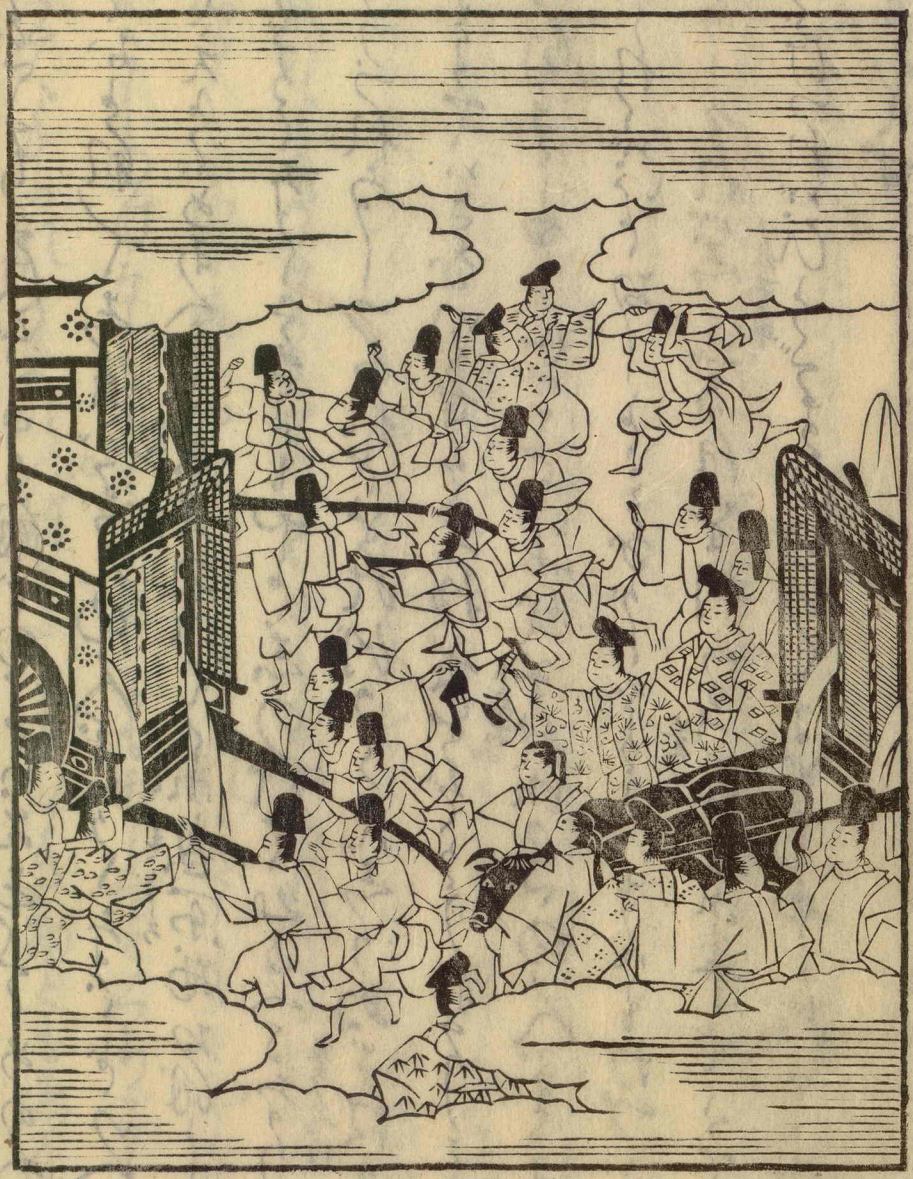
さぶめるまき御心をこころづきなしとおぼせど。あま
里にまぬ御手女のいふかひなければまやあらん。ふ
かうしも思ん。じこさてし給ふず。心ぐるしこさ（葵上くハいまんと）海の
御心ちまなやミまして。抱こころぼそげにおぼいたり。
めづらしう哀（あはれ）とおひこさてしまてうれしこさ抱から
これもくゆゑしうおぼして。さ海ぐの御つくし
ミをきせしてまつり給。かやうなるほどは。いとゞ御心の
いと海なくて。おぼしをこゝるとはかれど。とゞて
おほかるべし。それしろ母院（さいゐん）もおりゐまて。こさい
ぶらしの女三（兼祐ノ腹ニ）宮ゐまぬ。こうしくこさきにいとことにおひ
きこしまへる宮なれば。そらごとにはなりこまふを。

いとくるしうおぼしこれどことこそやうちのさう
べきおもとぞぎしさるどつねのうんわざなれど
いかあしうのさるまつりの程ぞぎりあるおほやけ
ごとよそふことおほく見所こよなし人がらとこそ
こうぞきいの日うんぞちめなどうずさぞまりて何
うまつり給わざなれどおぼしことよくちある
うさりまたこがさねの文うへのそう後のもん。るくら
までこれとくのへうやりわきこう宣旨にて大将
の志もつかうまつり給ひねてより抱見車心だう
ひしかり一条のおほち所なくむくつけきまで
さけぎたり所くのれさじき心ぞよまれくしこう

しかしひ人のそでぐちさへいとゞきこもれなり。犬
夜はうやうのれなりこさもおきくし給ふぬる。
れこちさへなやましきれど。おぼしかけざりけ
とけうさ人ごいでやをれがどちひさしのびて
こ侍らんこそそえなるべきれ。おほよそ人ごる
そふの抱れは犬ね夜をこそはおやしさやまが川
さへこそてまつらんとそれば。ぞ伏き國(くに)より。めこ
とひさぐしつまうでくなるをれらんぞぬをいと
あまりも侍(えづ)れといふを犬宮こさうしめして。れ心ち
もよろしさひまなり。さふらぬ人ごもさうぐしげ
かめりとて。はうよめ(車へ)ぐらしおほせしまふて

ゝ給日しけゆきて。そしきもわざとなしぬさ海にて
いでしまへり。ひまもなりしたちわたりしるに。よそ
をしうひさつゞきてしたちまづしふ。よきさ女房車（ねうぼう ぐるま）
おほくて。ざうしくの人るきひまはおもひさゞめて。
これさしのけさする中に。おじろ（此息所ノ車ニ）のすゝしるれしる
しるしぞれのさ海るどよしばめるに。いとうひさ
いりて。かのうなる袖ぐち。ものしそうざゝるど。拍の
多いとさよしまてごとさしまやつれしるけりひ
しるくゝゆる車ふたりありこれはさしまさやう
まさしのけなどすべきは車にもあしずと。くらごゝ
くて。まふれさとばいげ（地）うしまもわるき拍どもゑひ

すぎこちさはぎこゝる程どのことはえしらしめあへ
ぞおとれくしきごぎんの人ぞいかくなすどいへ
どえとぐめあへぞ。菓宮(さいかう)のれたくれ息所(ミやすどころ)抱おぼし
こゝろくなすぐさめよもやと志のびて出ゐるなり
かりつれなしつれどそれがうらはしりぬさばう
(葵ノ人詞)
ゆきていさかいもせそ大将殿をぞうけりも
ちひきしゆらんなすどいふ後それ(れ息所ニ)れうの人ぞもま
じれるがいとおしとこゝろがらよういさんもわづら
そしかれがしらずが程をけうつゐる(葵ノ)れ車だこそ
つぐけつれがひ(れ息所ノ車)とぐまひのあくまをしやられて抱
もみしず



（は息ニ）こころやましきほどにさる物にてうるやつれを
それとしられぬるがいとじうねたきことなどうぶり
なしまづなどもこれをしあれてすごろなる車
のどうまうちかけられば又なう人をろくろやしう
なりのきろうんとしつまうひなしまれもこそ人
らんとしまへどもをりいでんひまもなきまことも
なりぬといへばさすがまつたき人（添之）のれまへまうり
のまうるくも心ましやぶくのゝ面まぶるまあら
ねばまやつれ（添）なくすぎまつまつけても（は息而）中これこころ
げろしなりげまつねよりもこれこそのへうる
車どものわれもくとのりこぼれうるしうすぐ

れのまさき海どもくさらぬがなれど浮く思ひて
しりめまとぐめ給もなり大夏(蓼之)のはしるなればまの名
ごちてわたり給ひとものへどうちかしこまり心
ぞへなりけてわたる後なし(はしぬ)けれたるなりさ海
うるなりおぼさる
かげ(はしぬ)をのみ見たらしげのつれなきさまの
うきさ程ぞいとぐしらるくと洞(ほらぎ)のこぼるくなど人の
ゑるもたしたなれどめもあやなるはさ海かたち
のいとぐしういでぞへをみざらましかばとおぼ
さるかぞ(地)くまつけてさうぞく人のありさ海いこ
おうしとの人たりとゆるなるまも上達(んどちめ)ゆ

ことなる後ひとゝころの所ひしりまはをしけれ
しあり大将のかりのずいぞんに後上のぞうなどの
すゝといつれのことまもあらずめづらしき行幸
などのおりのわざなるをがふは右衛の蔵人のぞう
つゝうまつれりさらぬ所どいぞんどもくうろち寸
がるまぐゆくとゝのへて世にもてうしばうれ
まへるさ海米草もたまびかぬはあるまじげなり。つぎ
さうぞくなどいふもゞがるまて安がらのいやしからぬ
や文あまなどの世をそむきけるなどもしこれま
ろびつゝ拙見に出さるもれいもなかがちなりやがな
まくとゝゆるにがふはことなりまうちう化もけ見

てゝみきゝめたるあやしの物ども、手をつくりて
ひたいにあて、何ごとてまつり行ぎまゝるもおこ
がましげなる志げのおまで、それがかれのるゝむ
さ海をば志しで、思ひさうえたりなまともいれ給
まじきゝ思をずりやうのむすめなどさへ心のかぎり
何くしたる車どもまのりさ海ことさゝびたゝろ
ぎさうしたりなんおかしきやうくのゝ物なり
けゝましてゝうしたまたらしのびてゝかゝひ
給所(ところく)へ人志れぞかずなしぬなげきまさるかも
おほかりまり或君家(志きぶきやうのみや 槿家ノ父之)さしてぞゝ給けゝいと
まばゆきまでねびゆく人のうたりれ神(かゝ)などへ

めもこそとめこまへと。ゆくさしくおぼしこり姫君ハ
（ひめ一さこ様）
年ごろこそこそわたり給ふ心ざしの世人にまぬを。
なれめなすらんまてぶまなりまして。うつしもいかで
とれ心とまりなり。いとぐちなくてこそんまでいおぼ
しよりすがうさ人ぐいこそくまくこそこまでめてゆ
（きこ）
罕しあへり。まつりの日ハ大殿まは抱こ給ふ。大将
（賀茂祭ハ四月中酉ノ日）
の君。かれ此車の所（ところ）あらそひをまのび罕（きこ）ゆる人（あり）を
なれば。いとく（源ハ）おしうこしとおぼして。猶（なを）あらう
おもりなおもする人（葵ノ事）の。もれなたまさけをこれ事
すくしさき一所つきまへるあまりに。男（葵ノ事）ハ
さしもおぼけぐめれど。かくかたまうしひとなさ

けかはまべき地ともおぼいたらぬを此心をさてま
しるがひてつきぐくよりしぬひとのをさせたるか
ちかし此息所ハ心ぢせのいとよくげりしくよし
ありておはするもれをいかにおぼしうむじまけん
といとおしうてまうでまへりそれど妥宴のまぎ
もとの宴におりしませばさうさのそばりまこと
つけて心やすくもしいめん志給ひずごとくるとは
おぼしなすがしなすぞやかくかこうまそばくし
からでおりをとりしとぞちつぶやかれまふかしも
二条院にまちまれおりしてまつりこまいで給ふしの
おいはわたりまして惟光に車のことおほ給ふり

いるわたりまで惟光は車の[illegible]

女房いでたりやとの給て姫君（紫上）のいとうしけ

つろひたてまはせるぞうちゑてしたてまつ

まる給（源氏）さてはいざたまへもろともまゐんよとて出

ぐしのつゐよりもさうらふゆるをうきなるで

あひてひさしうそぎ給もざめるをそふいよりさ

日なんかしとてこよこのもろをめして時（とき）ともを

などしあふほどるまづ女房いでねとてわたいの

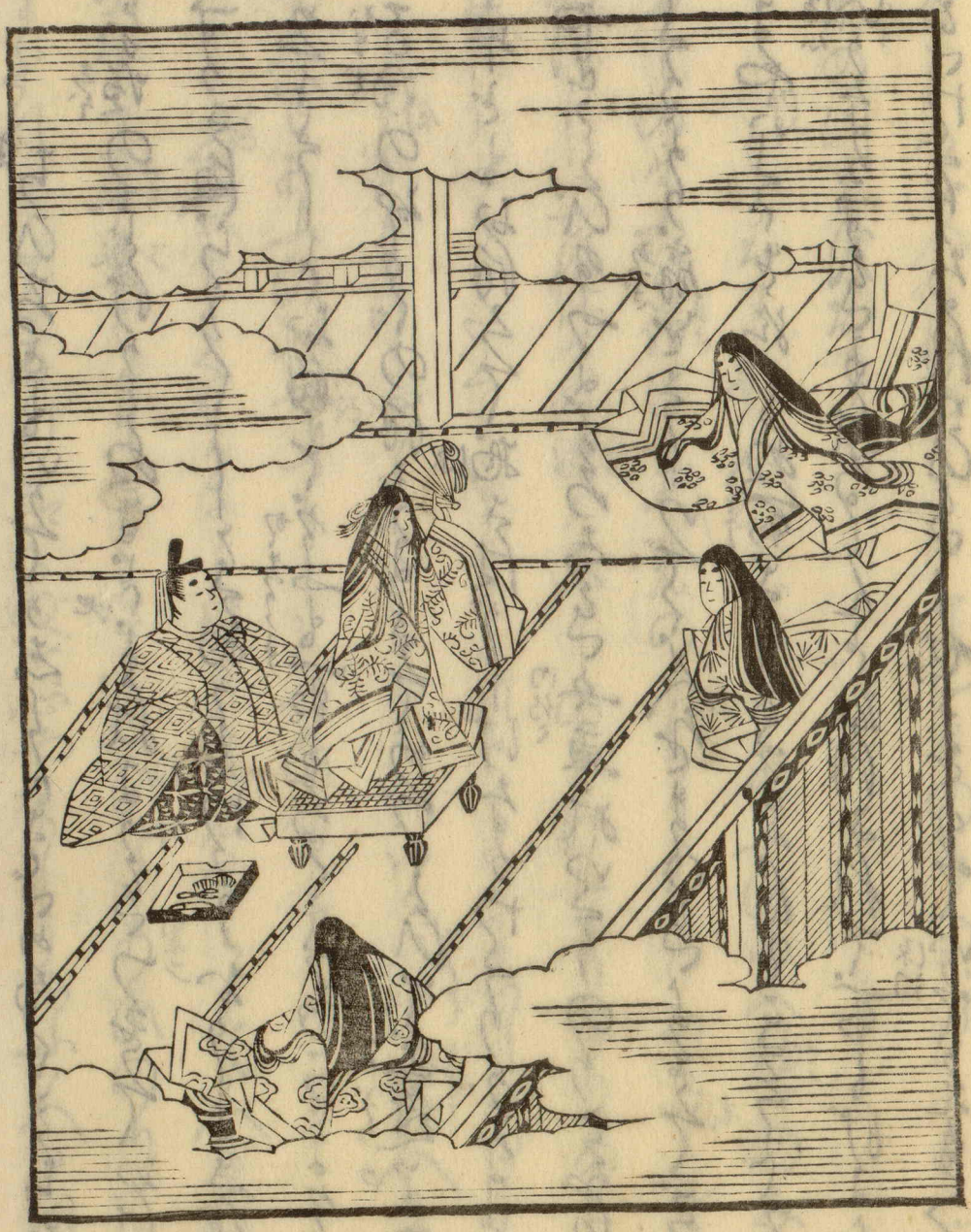
すがたどものおりしげるをあらんぜいとらうたげ

なるかんどものすそぐれやうまそぎわたして

うきもんのうへのもろまゐれるほどけぎやうる

ゑ程（源氏紫ノ事）さてのれぐしいわれそがんとてうたて前（とろ）

をうもあるかれいかにおひやらんとすらんとそぞ
まづらひまふいとなすがきひとともひらいがうはを
こしこじかくぞあめるをむげにをくれたるすぢ
のるきやあまり情(なさけ)なからんとてそぞそてくち
いろといたひきてしまふほ・お納言(せうなごん)あくれにかる
じけるしとこゝそまける
(源)そうりなきさちひろのそこのうるおさめに
ひり来(ゆくもゑ)をれのこぞこんとこさしまへば



ちひろともいかでかしらんさざめるくこちひ
ゑ塩のくどけかゝぬまど。もれまかきつきておは
すうさ海。らうくしき抱から。わうおかしき成
めでたしとおぼして。かふも所もるくしちこまそう。
馬場のおとぐのほどまとてわづらひて。上達アの
車どもおほくて。抱さはがしげなるわたりかたまと
やせらひおゆまよろしき女車れいうのりこゑれ
しるより。扇をさしいでゝ。人をまほきよをて。こゝ
まやハしてを給へぬ。所さりきてしんときてしたゝ。
いかなるすきもれるらんとおぼされて。所もげよ
きわたりなれば。ひきよせさをおて。いかでかえおへる

きてけりなれバひとしきをおもふに

ところぞとおもへるはなさんとのすへバ　内記　よしあゝ

扇(あふぎ)の川まはおりて

内記　たゞなすや人のうざきろあふひゆへ袖(そで)の志

ふしのきみを待(まち)けるに笑のうちはくとおもて　源　を

おぼしいづれバかれ源(げん)なはいしのきけなすりそりあさ

ましうかりがるゝをもいはまめくうれとはくさまりしるう

源　うざしけるこゝろぞおざるおもはゆか八(や)千(ち)民(うど)べは

なすべておふひを安いつし　内記　とおもひこそしそり

内記　くやしくもうざしけるかれ花のこゝてへぞれ

めなすら草葉(くさば)ざかりをとこそる　源氏　紫之　びゝくあひのりて

すゞれをこゝまあげ猶をめを心やましうさふ人おは

うひとひのはなりさ夜のうゑりしうりしり。
そふはうちしぶれてありしき給ふし。雅(れ)なるんのり
なるぶる人がしうはあらじ。そやとぞしりしきゐ。
いどまし(源)うしぬうざしあらそひうれとさうじく
しくおぼせどうやうはいとおもなうしぬ程の人にて。
人あひのり給へるまゐまれて。そうるる紀はいらへも。
心やすくしきてんもまばゆし。はし息所(ミやすどころ)もれを
おぼしうぶるくこと。年(とし)社(ぶ)よりもおぼくそひは
そりつしきうるはしひとてあへど。今はとてしりも
なれそぶり給なんはいと心ぼそうりぬべく。よれ人
きくも人はしへはなるんことくおぼせさうとて

さちとまるべくおもほしなるにはかくこよなるさ
さ夜にこゝかしひくるすべかめるかもやまそかくぞ。ぼり
するなまれうきなれやとおこさふしおぼしわづらふ
けまやれ心ちもうきこゝるやうにおぼされてなるや
ましうしき給ひ大将殿にはくだり給ひんことをもて
なるれてあるまじきことなすどもさ夜ふけ罷し給
なぞかぞなるらぬこ代見まうくおぼしすてんもこと
なりなれど今ハ程いふかひなきまてもれらんじ
そてんやおさかしぬにはあらんとこそしかづらひ
給へばさぞめるねまへるれ心もやなすぐさむと立いで
まへりしみそぎ河原のあらかりしせにいとゞよろ

げいとうくおぼしいられたり。大菱(菱)にはものゝけ
めきて。いたくはづらひたまへば。これもくおぼし
なげくに。はかなりきなどびんなきはなれば。二葉院(でうのゐん)
まもときぐぞけたり給。さはいへどやむごとなき
かたにことはしひきてしたまへる。人のめげらしき
ことさへそひまへるはなやこなれば。ころぐるしう
おぼしなげきて。ぞ。ほうやなまやなどに。我はかる
まておぼくとてなんを給。ものくけいきすぐまなど
いふもれおぼく出きて。さ面ぐの名(な)のりする中に。
人にさしまうつらむ。ここ身(こ)げからのはかまつと
そひたるさ面まて。ことはおどろくしうはづら

もしさる事ともあれどもまゐるうる時えうりく
おりまさまれひとつありいろじきげんご兄ども
あるがりずきつねさうち気色おぼろげの物はあらずと
ここうち大将の君のはうからひざしろこうしこく
おぼしあはするまゝれこやまた東二条の君るどがり
これにつけすべての御事はおぼしうつざめれば
上のこころもみだらめどちめさそ猶すぐりき
あへどさしてさるてあつことまうし。まれけ
とてもわざとかきれうこさとこさて事なうし。
すぐるけうはめれどうい人もしいおやのはうるま
つけつるもりこうまのぞはめないぞうさる

なぞ。おれくしからずこゝぞれあらはるゝ。ゑめぐぼく
ぼくと孫をのこなるさまて。おりくはおれをきらさ
あげけ。いこじうしへがたげまどふわざをし給
へぞ。いかまおもすべきまかと。ゆくしうかるしう
おぼしあらてかり。院(おん)よりもれとあらひ(ひま)僕なく。
れいのりのことまで。おぼしよらをまさ夜のうちで
けるまさまつけてもいとゞおしげなる人のれ身なり。
世中何まねくおしこ(きこ)字ゆかをさて給まれ。れ(こ)息(やすどころ)所は
こゞなるずおぼさる。うしれいとかくしもあらざ
まし。れいどこゞろをそうるりしところの車(くるま)
あらそひ。人のれ心のうづさまけるほか。其(萎)夜まは

さぬでもおぼしよらざりけり。うろ(れ見不)れものもひ乃
ミぶれは此こゝろ程例(なをれい)なるぞのミおぼさるれど。
かゝるわたりまて此修法(ぞかう)などをさせ給ふ。ぞ将どの
きくまていかるゝ此こゝろまうと。いとおしうおぼし
をうしてわたりまへりれいなるぬさひ所(じゝろ)なれば
いたう悪(よ)び給ふ心(源詞)より外(かう)なるをうたりなど。川ミゆり
されぬべく罪(きこ)し川げまて。なやミ給ふ人(藤くるり)の此有様(ミありさま)も
うれへ罪(きこ)し給ふ。ミ川(源詞)からいさしももひいれ侍らねど。
おやこちのいとことくしう。もひまどもるかくが。
こゝろぐるしさまかゝるほどをミすぐさんとてるん。
よろ川をおぼしのどめたる此こゝろなるべいと

うれしうなんなどうらひ罪し給つねよりもころ
ぐるしげなるれかしこき後ともうまあれと
こうてまつり給う此さけぬあさぼらけに出給れ
さ後のおしこさまもなるを（れ息一ふん）ありもなれなんことは
おぼしうへさるやむごとなきさるまいとゞ心ざし
そひなべきこともいでこさまされがひとりかるま
おぼし志げまり給なんとうやうまちきこえつ
あらんも心のこつきぬべきこと中こも此ぬひの
おどろかさるくこちしなる此文（深ノ心）ぞうりぞ。嘗（ふれ）
かるある。日（文句）ごろすうしとうるさ後なり何る心
ちのまたかまいというくるしげなりも面をを。

えひさまがてなすんとある所れいのことつけとき
給もれから
袖（法息不そで）ぬるゝ悪路（こひぢ）とうけまたりなどゝおりたけ
こゞれこゝけからぞうさ山のゐの水もことりま
とぞあるれまいなすをこゝらの人の中にすぐれたり
かしとうち（源ん）三給つゝいかにぞやもなる世かれ心を
かたちもとりぐにすけべきもなくまゝる思ひさゞ
むべきもなさ所くるしうおぼさるれうへりいとく
らうなりにたれど袖（文句）のミぬるくやいかにぬかく
らぬれかゞとにたす事
あさみにや人はおりたけわがかるは男もそれ

葵ノ紋大方かくばかりんかとく

内までかゝさ衛(ゑひ)ぢを。おぼろけにてや。このわくり

とゞけし宮(きさこ)さとゐなどあり。あふ(葵)まにれりのけ

いつくしまりて。いみじうかづらひ給ひ。これれいのきこえ

流息不父大臣之

ごゐ。こゝちく おとゞの流臭(らう)などいふもありと聞(きく)給は

流息不人

つきて。おぼし川ぐれだにも ひとつのうきなげ

こまりはべらんとあしうれなど。さふ心もなすれど。

物さふるおくぐるたまへりもしおいさもやあらんと。

おぼしまつることもありぬべしころ川は

さひのほかにてなほすぐしつれどかうまでぐ

なあさびるきこえのありさまのおもひわたらるゝ物

まゐりてみ給ひてさるなすりしみえそゝぎのゝらびとふし

まうしとおぼしうれましころ志げまり
がううおぼさるくなるや。すこしもうちまどろこ給
夢(ゆめ)にはかれ姫(菱ノ子)君とおぼしき人のいとこさよ
らまてあるところにいきて。とうくひさまさぐり。
うけくにもまずこけく。いかさひこふかごろいで
こさてうちうれぐるかなすどこし給こと。しつびかさか
ひまなり

（慧雲）
いかゞころうやげに分をもてゝやいはけんと。
うけしごろなしずおぼし給ありくもあれば
さなしぬことごとに人のれしあまはよきさ海乃
ことをしもいひ出世なれば。まして。これを
いとよくいひなしけべきしなりなりとおぼ
すに。いとなげし。ひたすら世まるくなりて
のちようゝミのことはよれつねのことなり。そ
れごとに人のうへまていけゝふうゆくしこさ
うけの我分るがらさうとましこさとをいひけ
けるゝすくをれうきことすべてつれるさひとに。
いかで心もかけ深くしごとおぼしうへをど思ふも

物をなり。秋冥（さいくう）ハしぞうちまへまふ屋かりしを
さ海ぐさたることなりて。此秋（あき）いり給。九月ハ
やがての冥（こや）ようけろひまへ給ハ。ふたしびのれ
へのいたゞき。とりかされてあるべきまゝ。あや
しくばけくしうして。けくぐとふしな
やゝ給を。家人いたじきざいじまて。れいのりなど
さ海ぐつうまけれる。おどろくしきさ海ハ
あらず。そこなりとなくまづしひて。月日をまぐし給
だ。秋（すゝ）夜（との）もつひまとふしひこさしまへど。まさるかる
のいたうまづしひまへバ。れうろのいと海なすげなり。
まぐさるべきほどまもあらずと。これ人もさゆゝ給

まぐさうべきほどにもあらずとぞ
へるに係(ゑ)にはかしこきありてなやこのへだいとぐ
しきはいのりのかぎぬつくしてをきせのへれど
例(れい)のしうねきはものけひとりさらにうごかずやん
ごとなきけんざどもめげらかたりともてなやむ
さすがにいこじうてうせられて心ぐるしげになるさ
まびてぞくしゆるべのへや犬ねにさしのべきこと
あくとののふされがにあるやうあらんとてちうきこ
きてのもとにいれさてまつりさりむげにかぎりの
さ夜にもれし給をさくしとう夜しきこともお
ちすうにやとて左大臣おとぐもこ大字やもすくししぞき給
へるとうぢのそうどもこゑしげめて法花(かけ)經(きやう)をよみ

ゑるいえじうゑうさしえき（源）掘（ゑう）のうこびら引（ひき）あげ
てえてまつりまへぞいと（菱）おりしげまてれたらは
いえじうゑうてるしゑまへるさ海よそゞ人ゑ
えてまつゑんまゑろえぞれぬべしましておし
うゑるしうおぼそことりなり志ろきれぞゑ
女あひいとくなやうまてれぞしいとるがうこち
ゑさ紙ひきゆひてうちそへゑるもかうでこそら
うゑげまな海めきゑるうこそひておりしうれと
こゆれ（源）をとゝへておかいえじ心うきめをこそ
れとてもれもえこそしまぞるさまへぞ例（れい菱）えん
ことわづゑしくさげかしげなるれまれをつと

さゆげまこゆげてうちまもり罪し給ふ潤(なぎ)のこゝ
ゆゑさ海をこゝゆふぞいかゞ衣(あれ)のあさかんあまりい
とゝなまさゆへは心ぐるしきおや さらのはとを
おほしゝ又かくこゝ給ふつるてぐらおしう覚し給
まやとおほしておまよごともいとかうふ覚(かぐ)しいれ
てさりともかしうはおもをじいかなりともかれ
らずあふをあなすれば人ぬいめんはありなん おとゞ(左大臣大宮ノ事)文
などもうきちぐりあ事ハ弟ぐりてもこて
ざなすれば何ひこるほどありなんとおほをとるぐ
さめゆまいであらぎや男のうへのいとくるしきを
(蓼河抽のけの云也)
たばしやすめゆへときこゝんとてるんかく海

いりこんともさしくまゝ忘ちぬをもれ思ふ人のこゝ海
しねそげまおくがるゝもれまるんあるけっと
なりけしげまいひる
なすげきまび（抽あけ）ぞまゝごるゝけがきまゝ浅（語ひ）びも
とあまゝ忘ちがひのつまどの語ゝ忘けこひその人も
あらずかくりまへるいと（添ん）あやしとおぼしめぐらす
まゝごれ此息（こやまどころ）家なりなり。行きましく人のとりく
いふ後よりしぬ抽どものいひ出ることかゝ字まく
おぼしてのまひけけをめまゝすく世まはりなる
ことゝそはありそれとうとましうなりぬ。あな心
うとおぼされてぐ（添詞）のまへどこれとこそよっしね

さしかまのまへとのこまへだしこぐそれなりれあり
さぬまおさましとはよれつねなり人ぐちかう
まいりもかこそいこうはぼさうすうし此しも
志げまりまへれば ひまおハすうまやとて 宮の此ゆ
もてこのを給へるまかきおこされまて 行るくむまれ
まめうれしとおぼしことかぎりなきさまへ人まかりう
にしこまへるれものけどものひこがりまどふけくひ
ひと抱さはがしうて のちのことまこいと心詠なし
いふかぎりなき 親どもこそさせまふけまや こゝら
りまことなりこそぬれば 山のぎするまくれとやむ
ごとなきさ 僧どもしこりがかまあをとしのぐひつ

いそぎまゐでぬ。おほくの人の心をけうしける。日比
のみ祈すくしうちやすこそ。いまはさりともとおぼ
す。れ修法などは又こそじめそへさせおへどまげは
けうありめづらしきれしづきまこれ人ころゆゆ
べり。院とりしめそてまつりてみこそちんぞちめ
のこりなきうぶやしなひどものめげ　くりまいりめし
きこれ。夷ぞとまこのくし事。おしとまてさへお
ぼすほどそれほどれさわうまぎるくしくめで
さしかれ家をどころはかくれありさ後を宇大なって
もこぞおもしずかねてはいとあやうくこさうししを。
こゆくりなもそことうち。おぼしそり。あやしう

これにもあしめれ心ちとおぼしつくるにれぞ
などもうぞしのゐにしきくてう。あやしさ
これゆすりまいらせぞこさんなどしめてこころを
すへだしだすをむさちやうにのこあれば銭身ちすくし
ぶなうともうすおぼさうてに。おもて人のいひ恩
もむことなどんにの后へことなされば心ひとり
まねばしなげくにぶとくれこころづかうにものかう
はばかりだちね殷にやうすうてのどめめて。おさまりかり
しはどのとくすずるにおこころく。おぼしされ
けふと殺人にけうもやすしく。くまるけ。らうくて
えそてまつんにほん。うにぞやうして　おぼゆべうくは。

人のれるあいとおしうよろづにおぼして。れふこ
ぐらりぞありける。いこう（萎）わづらひ給し人のれるぞう。
ゆしうころゆるびなげにられもおぼしこ
れどことなりて。れ（源）ありこもなし。れいと（萎）なるや
ましげるのこしこまへ。れいのさ夜にてもまぐ
こいめんしおもず。君（ぎこ）恵（タ）のいとゆし。さまぐこし
給れありさ夜と。いま（源）ならいとさ夜ことに。もてかし
づききこしおさ夜とろかなるず。ことあひこるゆち
して。おとゞ（たたト）もうれしういこじとさひきこしおつ
よこゞこれれこちとこなりておもあを。心もと
なくおぼとゞ。さぐらいこじかりし。名（ぎり）おまこそ

とおぼしていかでかはされこれ心をもまどひし
給えんかつ君のれまみのうけくしさなどの言葉は
いえじうまえてまつりぬへるを源えてまつり給ても
まづ忘しうちひ出されさをぬるに志のびがたくて
まいりぬえんとて源氏うちなどまもあまりひさしく
まいり給はれがいぶせさまにかふなんうぬぐちし
給ひすつしけぢかきほどにて罪させぢやあまり
おぼつるまきれ心のへだてあるべき事にもあらぬをい
とうをとろへたまへりといひるがしにれごしにてな
どあべきかしとてあるしぬへる事にあまりしちうう
まいりこれがいりてあなどまれぬれいしへ時ぞ罪

あふもなき後いとよはげるりされどむぎまるまさ人と
しひきこしし此ありき海を渡し出つれば夢
の心ちして、ゆくしらし程のことぐもなど冥し
給つゝでまもかれむげるいきもしてしるやうり
おくをしがひきへしつぶくとの給しことぐ
もおぼしいづるに心うそれがいざやこそてまゐしき
こといとおほかれどまぐいとゝゆげるおぼしゝあ
れがこそとて此程まいれなどさへ河内かひきこし
ものをいはなしひ給けんと人ぐ哀がりきこゆ、いと
おかしげるる人のいろうよりそこなるれて、あるか
なきかれ年気にそうしのへるき海、いとらうしけ

まくるしげなりぬぐしのうぶれたるすぢもなく
ちらくとうれる梳のほど。なりぐさまでこ程
れば。どし比何事とある思ことありておもひつらん
とおやしきまでうちまもられ給。院にすどにまり
ていとらくまでなんかやうまでおぼつかなかず。
そこでまつらがうれしかるべき所。宮の御とおりて
なに心なくやとつらて。とくぐしつるもくるしき所。
れやうく心づよくおぼしなして。例のおまし所に
しておまりわくもてなしまへがうへとりくて
もれし給ぞなどこそこそとさまて。いとさらげに
うちさうぞきて出る所。つねよりはめとぐめてこい

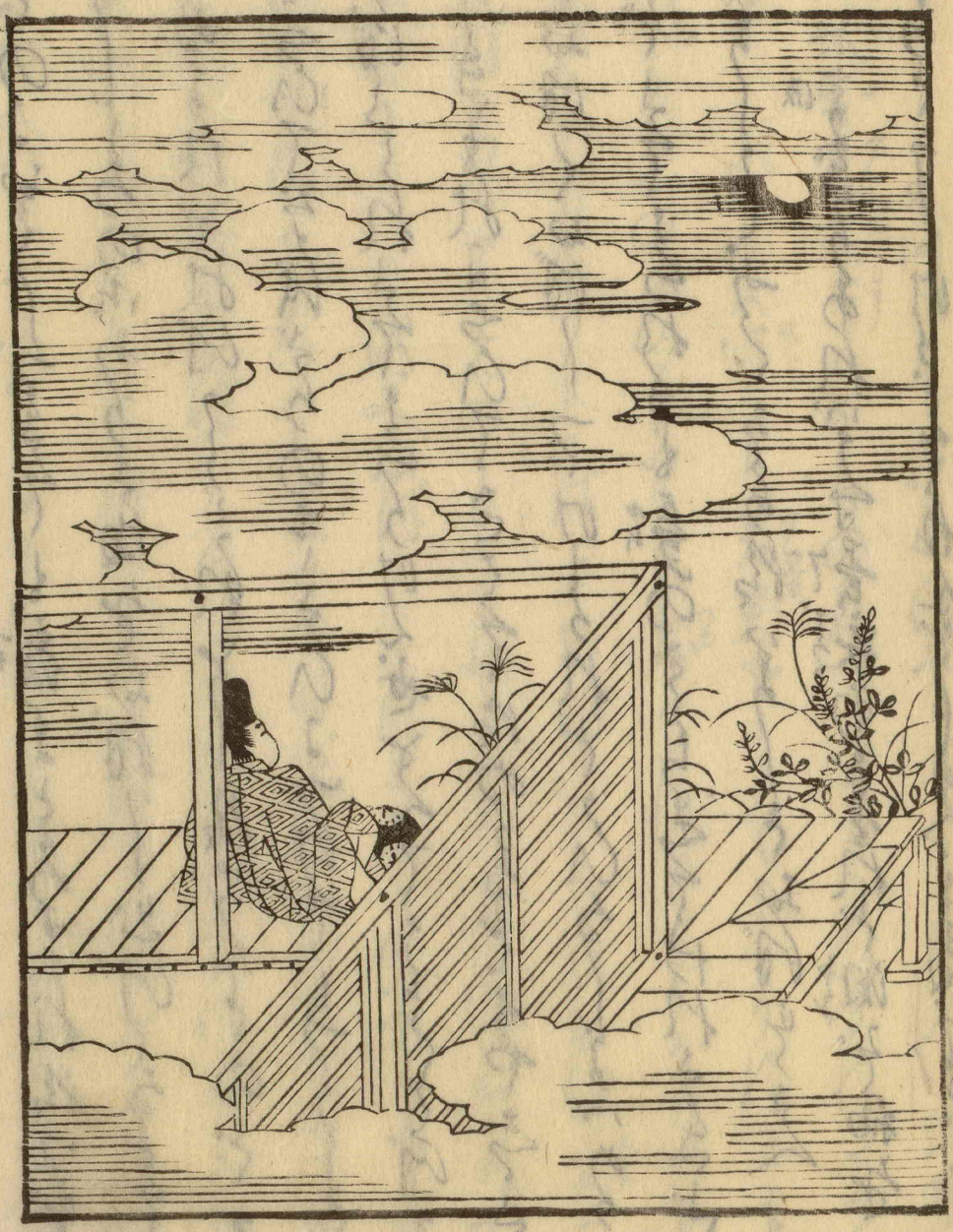
としてかしまへり秋(比)のつきめしあるべきささごめ
まで大夏もまいりまへば春ごちもいたくりのぞこ
給事どもなりて夏のれあたりしなれまくるばい
ふれひきつぐきむまゐとのくうち人ずくなましめ
やうなる程に紙(まいう菱)に例(れい)のれむれとときあげて心と
いたうまどひ給うちまれをうそこきてし給ほど
もなくたしいりまゐ(八月十四日ノ夜之)あしとそこまてこれもく
まうぞ給ぬれば ぢもくの夜なりかれどうくまり
なきれさいりなれば これしとやづれたるやうなり
のくしりさくぐかど夜(よ)まぐらりなれば山のざす
なまくれの傍(そう)たちもえさうじあへ給ひず いまは

さりともせひこゆこゝりつゝる。あさましそれば
とのくうちの人もれまぞあらうまとふ。所ごの此
とふらひのつゝひなど立ことこれば。え冥はずて
ゆきりこちていうしきれ心まどひどもいとおそろ
しきまでこゝ給れものゝけのこびくさるもいれ
さてまゐりしとおぼしてれ抱など。これがし二三
日こゝそまつりあへどやうくまゐり給ことゞもれ
あれはかぎりとおぼしまつりほどこれもくいせ
いこゞ。大将殿はかるしきことなそへて世中をい
とうきもれまおぼしまみぬれどこゞるゝぬ
あらりのとふらひどもこゝろうしとのこゞるべて

おぼさる院におぼしなげきとふらひ罪させ給
え海へ入りておもぶくしげるうとうれしきをも
まじりて御とぢいれ泪のいとまるし人の口にしる
がひていかあしきことにもといきやかへり給ひて
え海ぐあることなくかけそこなはれ給ことにもの
をとみかくもつきを涙おぼしまどへどかひなく
て日比になれバいかにしきんとて鳥邊野にあてて
てまつる程いらじげるうことおぼかりこゝろにかな
これれとくりの人ぜもてらぐの念佛のそう
なれどそうらひろきに野に取まるし院とばさら
にもいさずこささいの家去家などのれつらひぞうらぬ

而どのもまいりちがひて、おかぶいらじきれとふ
らひを罪し給、おとゞはえたちもあがり給ひず、かゝる
よそひのとゝ忌は、わくさうの子まをくれたて
まつりて、もとよふことくそぢるさあふを、そらの
人なるしうとゝてまいる、夜もすがらいらじう
のしり給ふ、ざしきなれどいともくるされ
かぐるぐらを、れ名称まて、暁ふくかり給、つねのこ
となれど、人ひとりがあまるこもこ給ひぬことなれ
ばやとふひるくなげしこがれたり、八月廿日余日の
はり明なれば、色の気色も衰すくなりぬ、おとゞ
のやうよくれまどひまへるさ夜なこ給もうと

くらまいうじ されど 涙(ふたら)のミたまがめられぬて
のぼりぬるをふりハそれとわかねどもたまべ
てくもゐのあくれたまるかれ



添
とのまおうしつきても。霧(ゆ)まどろまれ給けど。
うしごろのはありさ海をおぼし出けなどて
つゐまはをれげうこれとし給てんとのどか
まちひておぼざりのしさひにつけてもつらしと
おぼしられてまつりけん世をへてうとくしげか
しきもれまちひてきさて給ぬるなど。くやしさ
とおぼくおぼしつゞけられどかひなしまばめり
はぞこそまつれるも夢(ゆめ)のこゝちしてかれさきに
さましかぐ。ふくそめ給はましとおぼしさへ
添
かざりあれば寸雲衣(ずこぞろも)おさなれど泪(ぞ)袖を
ふちとなしけり。とてねんぎしのへるさ海。つとゞて

まめかしさ海さりて雅思びやかまよう給ひて法界
三昧普賢大士とうちの給へる。そこなまひなれたる
ほうしからはけるり。若恋とうてまつり給ふも。
ひまかく志のぶのといとゞ家なれど。うるうるこ
さへたまらましかばとおぼしなぐさむ。交ハ
志げこいりてそのまくにおかさのぐり給ひて。おや
うぎまえしかば。又おぼしさはぎて。ぬいのりなど
をさせ給。くうるくすぎゆけば。ぬわぎのいそぎな
どをさせ給も。おぼしかけざりしとなれば。つきを
ぜいうじうたん。なれめまうるほるをぞ。人の
おやはいかでちかめる。ましてことちりなりまる

さぐひおもせぬぶまさうぐしくおぼしつる
に袖のうへのむのくぐけたりけんよりもあさま
しげなり犬狗のきこゝハ二条の院にぶまもおしらさ
海にもつたり給ふ寸おもれに心かくせひたすげき
てをこたひとまゝまゝしまひてあしくらし給
所にまはれふしぐらりぞしてまつり給ふ此は息所ハ
秋宮の左衛門のつきまいり給にそれぞいとぐ
いけくしきれこさまゝりまゝとつけてきこしも
ましひ給ひぞうしとせひしにあしよ也ふすべ
ていとしくたりまてかゝるほどしぶまそいぎ
らましかばねがはしきさ海にもたりちましやおぼ

とてはまづ[illegible]の[illegible]のさうぐしくてもれし
給らんありさぬぞおとなぼしやしるゝよるハ三丁
のうちにひとりつしぬまとのゐの人ぐにちうう
めぐりてさふらへどうさはらさびしくてどうさ
しもあれとねざめがちなるまゝ思すづれたる
かぎりえらひさつしたを給念佛の嘆がこるぐ遊び
がうしふるき秋のあはれまさり明風の[illegible]
しきけるなどなりしくぬれひとりのまゐりしる
さまへる朝ぼらけのきりわたれるまさくのうしき
ぐめるえぐまこうさあはまびのうしなるふうら
けてさしとうさていまさりいまめりしうもとて

こゝのへばかりや家のはるかすり定めし程なくおぼ
しきつきんや
人の世をあはれとみるも家けさるまゝに
かく袖をせはしきやまで今の定まらぬ人今ま
思てあすんとありつれよりもいつまもりいすへるろこと
御そかぐる座つらう結ぬうつれかのはとうつくひ
やと心うし。さりとてくさくてとゝるひ定かしさら
むもいとおしく人のれ花のくちめべきこしと覚えし
こぶろなる人はとてもかくてもさるべきまるこそは
花し結けめおすめくさうしとさぶくとけざや
るまゝまへけんとくや一まへつけがれ心るぶつらんや

えおぼしなすをもてまじきなめりし。秋（さい）家（くう）の此
きよ海りもわづらりしくやなど。ひさしうしひ
わづらひ給へど。わざとあるれかへりなくもなさけ
なくやとて。ずらされのまばめるうらに。（久ノ句）よるう
ほどへ侍るける後。しひ給へをこそ。ずなぐら。川くま
しき程はさらにおぼししるらんやとてなる
（源）とまる男も消（きえ）しまおるじ家の世に心をつら
ん程ぞ。そらるきが川はおぼしけちてよし。此らん
をずもやとて。これ（さイ）にもとさてしまへり。星（此息不）においする
程なりそれば。悪（しの）びて三給て。ほのめしまへる。年（けしき）を。
心のをよくしるくこ給てされがよとおぼしもいと

いえじなをいとかぎりなきものうさなりけるも。
かやうなる罪(ざこ)ありて院(ゐん)にもいかにおぼさん。故前坊(こせんぢう)の
おなすじきれたらからといふなるにもいえじうせひ
かたしきたらしさをもてぞれ妻(さいくう)の世とともはん
ごろにきたしつけさせまひしかば。それれかりに
もやがてえたてまゐりあゐかたんなど。つねに
の給ひもてやがてうちずたしまへとこそびく罪(ざこ)
させ給しをぞにいとあるまじきことくおもひも
なれましをかく心よりほかにわかくしきまれ
せひとしてつゐにうきゑをさへなぐしゐべき
ことくおぼしうぐるくに。祝(をを)例(れい)のさ夜にもおもひもず。

さるハ大かたの世をつけて心まてよしあるをこそ
ありて昔(むし)よりゐたるくもれしまへぐのこゝやの
れうけろひの程まもおかしうい海めきてゐること
おほくしるして夜(そん)ぶ人どものこのましきなど
もおきゆふの家わけありくをそれころのやくる
なんするなど罪(きて)まてもだねのきこハことゝりぞう
しゆへもなくまでつきたまへる物をもし世中
まあきりてゝぐりまひなばさうじくしくもあるべき
かなしくさすがにおほされなり御法度(おうじ)などゐ(すぎ)ぬれ
ど正目(しやうまち四十九日之)まで犯(なと)こもりおかすなりしもぬれつれぐ
を心ぐるしがりまて三位中ねハつ(以中ねハ三位ノ事はしことんより尤也)ありまいり給

川ゝ世中の此物語(ものがたり)などまめやかなるもまゝ例(れい)乃
こゝぶりがたしことゝとも罪(きこ)し給つゝなぐさめ罪(きこ)し
ゐまかれ内侍(ないし)ぞうちたしひ給くさひにはなる
めるだ物の君はあかいとおしやなどおとゞのうへ
かいてうかろめまひそといさめ給ものからつねに
おかしとおぼしたりかれいぎよひのさやかなり
し秋(あき)のことなどさしぬもさ海ぐのすきごとぐも
とかゝこゝまく海なくいひあしたし給ひてくは
衣(あれ)なる世をいひくてぐちなきなども志まひなり
志ぐれうち志てもれあれなる菅(くれ)川ゝ中物の
君ゝ夜のるをしさしぬきうすらかに衣(よろも十月に)がへして

おくしてあざやかに心をげかしきさ海してまいり
まへり。志(源)はましのつまれかうらんまをしかりて。
霜(しも)がれの前栽(せんざい)えるまふ程なりけり。はあらくかる
吹(ふき)しぐれざとしたる程ど。泪(なみだ)もあらそふ心ちして
雨(あめ)となり雲(くも)とやなりまけん。今はしらずと打ひとり
ごちて。つゝづえつきまへるはさ海。女(はゆん)まてはいん擬(すて)て
なくなるんこましねがるらずとまりなんかしと。
色(いろ)めかしき心ちまうちまもれつゝちかう。はいね
まへれば。志(源)どけなう打(うち)えぐれこまへるさ海ながら。
ひまぐりをさしなほし給。これ(地)今はしらしこ海
やかなる夜(なる)のはなをしまぐれなるねの川やくかな

ふひきうきねてやつれぬへるしもこそもあらぬ
こちぞする中ねもいとあくれなるまゝみり
なぐめぬへり

雨（以中あめ）となりしぐるゝ宅（そら）のうき雲（くも）といづれ乃
うるとはきてなぐめん ゆく恩なしやとひとり
ごとのやうなる後

（源）こし人の雨（あめ）となりまし雲（くも）ねさへいとぐしぐ
れまかきくらす比（ころ）とのくるまゝ此（ミ）氣（けしき）色もおきからぬ
程しるくこゆれば（以中ふ）おやしうとしごろはいとしも
あらぬ此心ざしを院（ゐん）などねたらての給ひをおとぐ
の此もてなしは心ぐるしう古宮の此ゐるぞ海り

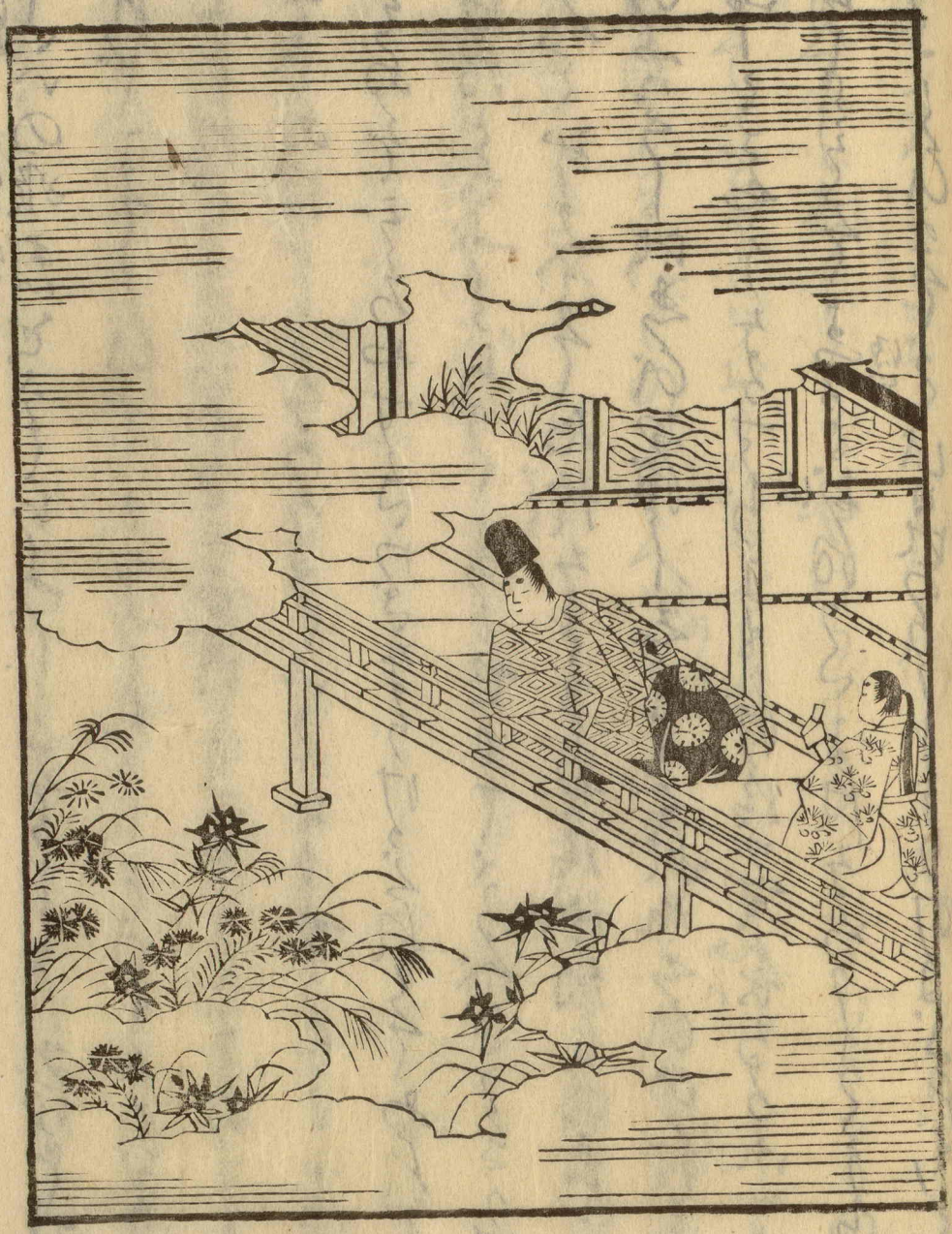
もてはなるまじきなどかたぐまさしあひたれ
ばえしもかりもてなすぞ抱うげるれうしきな
がらありへ給なありうしといとおしうこゆるありく
ありつる後まことよやんごとなくおもきかたに
ことにさひきそて給けるなありとこしなにはい
よいよくちおしうおぼさるよろづにつけてひかり
うをぬるこちきてくむじいたりかれたるさる
菜(くき)のなするはまんだうなすでしてなどの咲(さき)いで
たる後(ゆ)おしきなて申物のたち給ぬる後(のち)はわり(夕雪)君の
れめれと宰相(さいしやう)の君して
菜(ゆくき)がれのまがきなのたるなすでしたる後わり

れし秋(あき)のこゝろぞこゝろ・ほひをとりてやれらん
どうらんと罕(きこ)しおへり・げ(地)はなすに心ちきれ思みが
かぞいうじうなりしき・家(大家)は吹(ふく)風につけ
てぶる・末の染(そ)より・けはもろきれるうぶはまし
てとりあへ給ひぞ

いまもうて中(大家)く袖(そで)をくるすかれかきほあれ
ましやまとるぞしてなす(源)はいうじうつれぐなれば
何さがかのこやはかふの衰(あはれ)はさりともこゝろ給らん
と・をしとゝらるゝれ心ぢへなれば・ろしき程なれど
ちてし給ふしまと後なれど・されものとなりまる
なれ文(ふみ)なれば・どがるくてれらんぞさす・そらの文

ありつるのことは
源
わきてこの暮こそ袖ハ露けれ物おもふ秋ハ
あまたへぬれどいつも時雨ハたくしあり成て此の心
とゞめてかき給へるハつねよりもみ所ありてすぐし
がたきほどなりと人ごともなくしけつゝもおぼされ
なればおほうち山をおもひやりきこえてすゞしくや
てしとて
秋ぎりにたちおくれぬときこえしより
しぐるゝ空もいかゞとぞおもふとのみほのかなる
すみつきにて源心おもひなし心にくしたまふつけ
てもこまやかなりけるは世にあらはれひと

しもこそにあられるあぼし給人の此心ざ殿なり。
つれなすしらざるべきおりくのあられをもてぐし
給ふぬ。これこそくるゝなさけもえたりべき
わざなれ。なす後ゆへよしすぎて。人めりこゆ
ぐらりなるにおまりのなんもいできけるを



さいの姫（ひめ）君（笑ノ）を。さくあつしくてしとおぼせ。つ
れぐまてしひしとせふんかしとつとうしあり
なれど。さぐめおやなきを。ほとゝきくんこちし
て。こぬほどうしろめたくいかゞおもふらんとおぼ
えぬぞころやすきわざなりけるくれもてぬれば
おほとあぶらりくまつらせまて。さうべきうざりれ
人ぐおまへまてあ徒（ごち）などをさせ給。中納言の君と
いふはさし比思びおぼしたりぐこれはせひの程を
中くさやうなるすぢまもかけ給ひず。哀（あはれ）なる御心か
なとこゝろてまつるに。おほかるにはなるしくこち
うしひまてかく（源付）此日比ありしよりけに。これもく

まがざるるなくしなれくてえしもつねまく
らずまし走(こひ)しからじやいらじしとおぼさるもの
まてこぐうちぬもひめぐらすこそこ人がさきこと
如何かなれとのまゝ人がいとゞ(内々)見なくしきて(河)いふ
かひなきはしとはこぐかきくらす心ちし給れば
さりもはまて(なごり)名殘なくしき海にあくがれまてさせ
給ひん程ひ給ふるこそと(きこ)聞しもやらず(源あれ)衰とこ
ひうしぬて(河)なごりなくはいとこゝろあさくもとり
なし給かな心なかなき人ざまあしばこゝりて給なん
抱と(命)こそこゝろなれとて(ひ)史をうちなかめ給へる
まゝのうちぬれ給へる御ぞめでこゝさりつきて

らうさくも給しちいさきわらはのおやまゐるく。
いと心ぼそげに思へることゝりまゝ給て。あてきは
今は我とこそせしべき人なめれとのまへにいらじ
くるく程なきあてめ人よりはくろくそめてくろきう
ざこくはざういろのもう夜などきてうもおりしき
凄なり。背をまゐれざらん人はづれぐとしのびても
おさるゝ人をこまてぞ出しまへうし世の名称
なく人ぐさへかれなばこれぎなきもまきりぬべく
なんなどこれ心なぐらべきことゞもとのたまへど。
いでやいとゞ待どとうぞ成給はんとせしまいとゞ心
ぼそし。大夜は人ぐまきもくほどくとこき

ひとりゐるさまもてあそびぬどもまことまかのれ
うるさきなるべき物なれどわざとなしぬさ海にとり
なしひとれくぐらせ給ひ。恋いかくてのこも
いかでは つくぐとしとぐし給ひとて。院へまい
里給ひ車さし出てごぞんなすぐまいりあひまる
ほどおりしりがかなるしぐれうちそこさて来れ
さそふ風あれこそしつゝ吹きしひとるまおきの人に
さかしふ人ぐ。ものいとぐ心ぼそくてすうしひまゐり
つゝ袖ぐもうつほひわたりぬぐまさりもやがて二条
院にさまりあべしとてさかしひの人ぐもしこ
まてまちきえんとるべしとのくらち出るに。

なふなしもとぢむまじきことなれどまゐるなく
まれがるし（左右下）おとゞも（大字）宴もなふのなしきまゐるし
さあらしあてあげさう宴の（かまへ）前にはせうそこ四丈
まへり（添付）僧にあげつるがりの給ひすまよりなふ
なんまいり給ひおりしさ海に立出給ひに川なても
川ふまでなかしへ給りにけるしとゝぞり心ちのゝ
うごきてなん（さきこ）四丈させんも中りくに給べなれば
しまもまいり給しめとあれば（大字）いとゞ志く宴はめも
えし給ひどもしげゝいりて此ゆりも元きてしなり守
（左右下）おとゞぞやがてわたりまへるいとゝへがるげにあげ
して此袖もひきもるち給ひ守ゝそてまつる人ご

もいとかなし。大将のきこえは世をおぼしいぐくうこ
といと海ぐまてなき給さ海あれはこそふかき抱
かし。いとさ海よくなす海めきなへり。おとゞひさしう
こあらひなひてよろひのいまりはさしもあり
まじこさことはいかてゞは。潤(なぎ)もろなりわざは侍りを。
ましてひるよなうせひこまへまどそれ侍。心をえ
のどめ侍られば。ひとめもいとこゞうがちしく。心よ
ちこさき海は侍りべかれば。院なとはもえまつり侍
らぬなりことのつゐでにはさやうにおもむけそう
ききせなへ。いくだくも侍りまじこき老(おい)の末(すゑ)に。折(うち)揺(すて)
られこうが。いしくも侍りるとぞめてせひしげめて

の給気色いとまりなし。君もしらびくらみ打うこ
てをくれさきぶけほどれさぶめなきハ世のさがと
こゝへ志りちがらさし何ちりておぼし侍心まどひハ
さぐひあるまじきわざるなん院にもあ猶養し
侍らんにをしたらしせ給てんとこそし給さらば
時夏もひまるく侍める代薯ぬほどにとそぐのし
こそし給うちこまそし給に此末恨のうしろ傳子の
あるなどのあけとをりしろうどに女房此人づり
をしろりてこそうすきにびいろどもをきつゝこれ
いこじう心ばそげまてぶち志ほこれつゝ升あつ
ありしるに代いと哀とこゝにおぼしすつまじき人も

とまりぬへればさりともものくついでにハ立よりせ給
たゞやなどなぐさめ侍る後ひとへにせひやまなさ
女房なまどもかふを恨におぼし捨つる事とおもひ
くむぞてなぐく別ぬるるしひよりもしたゞ時ご
なれつうまいる年月の名殘なるべき後なげ
き侍るめるなんことなりなるうちとけおかします
ことハ侍らざりつれどさりせもつゐにはとあいな
ぶのミ志侍りつる後げにこそ心ぼそさゆふべり
侍れとても又なきなめいと（源詞）あさそうなる人ごのなげ
きにも侍なるかれまことにいかなりけと のどうな
せひぬへいるほどハとのびうれめがるくおるもも

給つらんを中々今はなまをこれまでかをうる
里給らん今はらんじてんとていでぬ後おとぐ
ミをくり罷(きこ)給て入ぬへるまれ志川(左大臣ん)らひよりつじめ
何りしまうちうこともなまれど兎塚(うつ)(とつ)のまるまき
ぬらぞ志ぬふ兄丁のまへ入れ(ミ)まぐりなまどうち
ちらして手(源ノ)なしひまてこまへるをとりてめ後
志ぬりつミぬふをかうさ人ぐそかるしき中まも
ゆく思むもあるべし哀(あれ)なるふうとぐもかられも
やまとのもうさけがし川さうまもまなまも
さ夜ぐめづらしさ夜まうさまぎこまへり。うし
このれをやと兎(そ)をあふぎてなぐめ給(比)よそ人ま

えてまつりなさんかおしきなるべしふるき抗
かるきふせまぐれとくもまかせある所
なきむぞいとぐるしきねし床のあく
がれがるき心なるひは又霜の笠しろしとある所は
君なくてちりつもりぬるとこ夜のつもうち
えしひいく夜ねぬらん ひとひの笠なるべしかれて
まじれり 実は明らんぞきせまて いふひなきこと
をぞさりもれまて かうかるしきさぐひ世はなく
やはとせひなしつく 契なすがらて かくそろをものど
くすべくてこそはありけめとかへりて明らくさき
の世をせひやまけなんさまし侍をさぐひごろは

そへて悪しされしへがうきと。これぞねのきこの。
いまはくらそまなり給ひむるんおかぎいうじく
しひしまへらるゝ。ひとひ山門をこし給ひぞ。かれ
かれまおんをしをぐる。あかぎむ。いらくしひ侍し
と。朝夕のひかりうしなひてはいかでかるがしふ
べからんと。れこ思も元志のびあへしまはぞるき
あまおまへなりおとれくしきへるぞ。いとかるし
くてぞくうちるまさるゝ。そぐろさ年き夕のつし
きたまり。つきへぐは前くまむれぬつ。をのがどち
何られなりことぐもうちかたひて。とのゝおぼし
の給はするやうは。若君をこそてまつりしこそは

なぐさむべかめれとおもふもいとくちうるさほどの
れるこゝろこそとてをのくあらしさ夜にまかでて
まいらんといふもあれどうるゝにもられおしむ
ほどをのがぢくあられたまふことぐもおほうるを
院へまいりまへれば院詞といふくおもやせりかり
さうじまて日をかけやとこころぐるしげる
おぼしめしておまへまてもれなどまいらせまて
とやくやとおぼしあつかひ罪させまへるさ夜衣
まうじけるし中宮のれるにまいりまへれば
人ぐめげらしがりこゝろてまいる令嬢の思ひて
おもひつきをぬことぐもあ程なるまつかてもいう

まとれをうそこさてしまへり。つねなき世におほ
るにもせふのへしりましをめまちくに待けるに。
いとしこさとおほくおもぬのへしぐれしも。
さびくのれをうそこまなぐさめ待てなん。かふ
までもとて。ざらぬおりぐるあれかしをさり
そへていと心ぐるしげなり。むもんのうへのれぞに。
まび女のれしるがされ。えいまさしまへるやつれす
がるとなやかるれよそひよりも。ぞ夜めしさまさ
ましまへり。恭定にもひさしうまいらぬ。見れかるさ
なぐ。四夜にまて。夜ふけてぞまゐで給。二条院にいらる
こいらひみがきて。おきこそんな待四夜しらぐ上らう

たゞれまうのがりてぞれもくとさうぞきけさ
うぞうるとこゝろまつけてもかれぬなまゝらむし
こりつゝ氣色どもぞ衣まさひまされ給はさうぞく
なりうへてよしのこゝろはまゝりまゝり衣がへの御志
のしひくもりなくあざやかまえしてよきわゝ人
わらはべなりすぐるめやすくとくのへてお納言が
もてなし心詳なきところなくこゝろまくしとこ
ゝ姫君いとうのくしうひきつくろひておはす
ひさしかりつゝ目どまいとこゝまゝりこそととなび
ゝまゝれとてちいさきは末根ひきあがてこゝそ
まつりこまへばうちそばこそこゝらひゝまゝるは古海

あるぬ所なしほかげのれうとそらめうしらけき
なるぞうぐかれ心つくし男ゆう人のれさ海ぶぐ一家
なくもなりけれとこ給まいとうれしちうく
よりまておぼつかなりけるほどのことぐもなすど
きてしまてひどろの拍径のどうまきてしまほし
かれどいまくしうおぼしそべれがぞぐしそこと
うこはやきしひてまいりえん今そとぶしなくこ
そてまうべかれがひとりしうさんやおぼされんと
うこしひきてしまをお納云ハうれしときくもの
うらなすばあやうくさひ男也やんごとなきさしのび所
おほうかづらひこまへれがまるこまづらりしきや

さらさら給はんとおもふぞすくなき心ならうかれ
さるはさりけて中将の君といふまれおしなべて
まゐりすさひておほとのごもりぬおしあけ方
君のかれもとよりれ文してまつり給あはれなる夜のさまと見ん
なほまづこれをめでたくものこそなんいとつれなくは
なずめぐらなれどおぼすところされなりこそ給うて過
此て覚しもされどひめ君のたおすみもあくま
ほしうとくのひさていとめでたうのこみておそれ
まげなりしめ給もこころしすまれば心しきこえ
うるしとなどおりくなくろうまんどみも
ちら給もあけしきなりつれづくおぼすまゝうかうで

しるべきは碁うちぺんつきなどし給つ日は[illegible]
し給はこゝろぐへのらうくしくあいぎやうつき
しるべきこゝろふれどもの中にもうつくしきしぢ
をしいでまへぐ[illegible]ばしるべちこゝろ手[illegible]こそこゝ
さうるのらうこゝろ[illegible]はありつれ志のびがたく
なりて心ぐるしそれどいかゞありけん人のいぢめ
こゝてまつりかくべき所中にもあらぬに[illegible]とこ
君はとくおきなりて女[illegible]君はさしにおき給はぬあし
こありぐへいかなれいかくなりしまするらんれこそ
ちのれいなりしぎおぼさるゝまやとこゝてまつり
なげくに[illegible]は[illegible]り給とて出現の[illegible]とこ[illegible]の

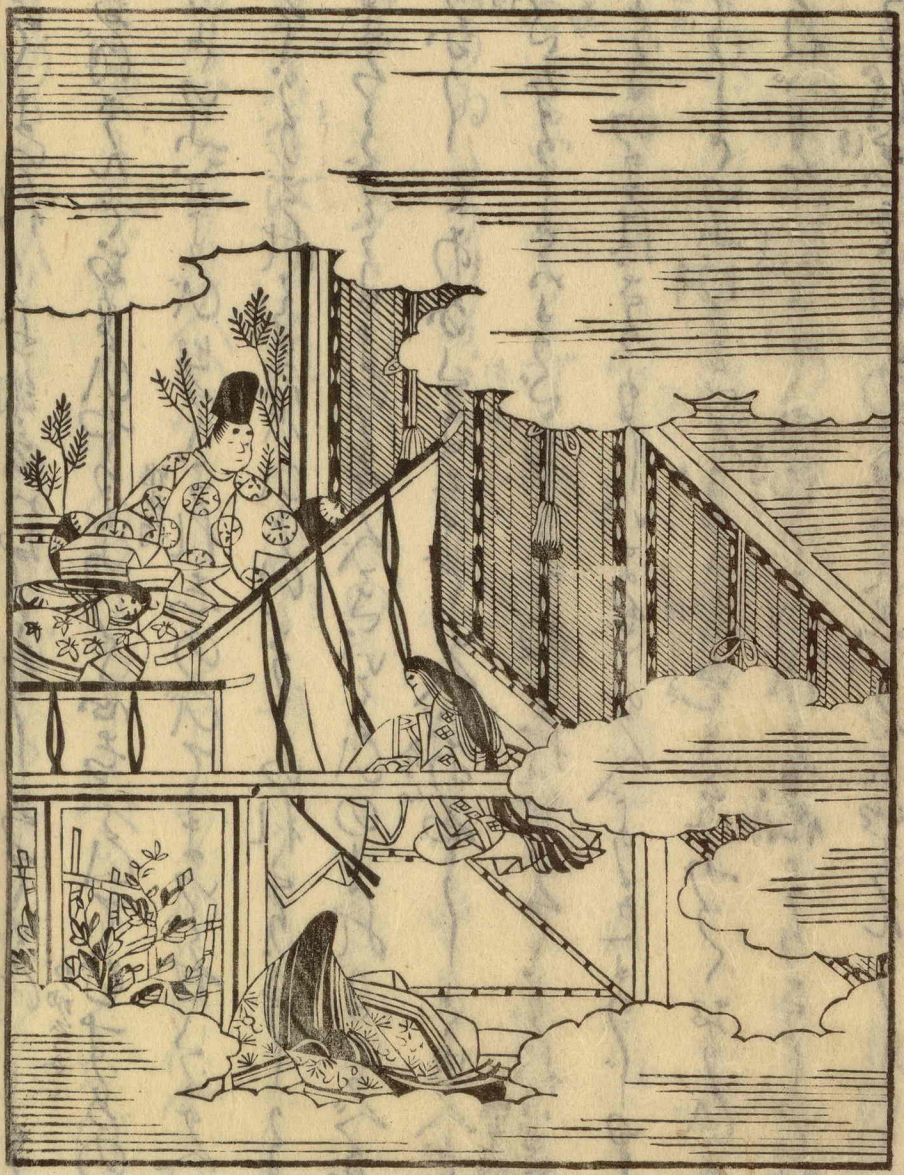
うちまさしいれておりしまかり人まゐりしうし
てかしらもたげゐるまひきむもとびしろ文は枕乃
もとまありたまゐ心もなくひきあけてミゐへど
あやなくも聞けるれよ後かされさすがうり
なれし中の衣をとりきもさひゐるやうなり
かゝる此心おはもらんとはかけてもおぼしよら
ざりしかどなどてかう心うかりける此心をうしか
くこのもしらぬまもひきてしけんとおきましう
おぼさるひかゝるはうりゐてやましげまし給
らんハいかなる此こちぞ、かふまゐごもうるでさう
ざうしやとてのぞきゐへど、いよくはづひ事

うけ玉てかしまへりじん〳〵志りぞきさうらへば
よりのておぼくいづもゑきれまてなしぞ思ひの
ほかなるらうぜきて、おりしそれがしもいかなるおや
しとおもふんとてかみとまと引やつきすへれば
あせまをしひらいてぴらいづこもいづうめ精路
へう、おかうくそ、これはいくゆくゑきわざしまして、
よろげるこうらへさらしおへど、まあしくなりつゝ
つゝしやせひおそ露のれいへもし落らで、
おりくさうきらしそまつらじとひとくに
しみぎぞでのそれすずりあそてとおへどもれ
もたゑれどけゝの心ありさ波やとらうさこゝて

まつりなて日ひとひいりぬてなぐさめ罪なへど
とけがたき御気色いとゞらうたげなりそれよさり
ぬのこのもちゐまいしをたりがうおもひの御ど
なれバとくしたきさ夜まハあしでゞるゝがうま
おかしげなりひまりごなどぐらりと気くまてまい
れりとゝなて恋(源)これこの事(れこ)に出なて惟光(れこう)とめして
これ(源詞)もちゐがうなぎくまとゝろときさ夜まは
あしでおもてのくれまいらせまぞふくいまく
したき日なりなりとうち御ゑしてのなふ御気色
と心(惟光)とき拍まてふとせひよりぬ惟光(れこう)たしかまも
うけ給ふしでげるあいきやうれたしめる日えり

してきこしめすべきことましてさてもねのこハ
いろけかつうまつらせべう侍らんと、まめごちて戸
をば、(源河)さけかひとけうてもあらんかしとのまふり。
(惟光)心しらてくさちぬ。(源)もれなれの面やと君ハおぼして、
(惟光)人まもいさで、まづらといふごろり。さとまてぞけ
ろりぬさりけり。(源業と)君ハこしらへ(まび)俺まていまりじめて
ぬしとまもてきこしらん人のうちすりもいとおかし
くて、(とりー)手ばあくれとさひ(きこ)聞しつるハかたりしまも
あらざりけり。人の心しそうしてある面ハあれ。今ハ
ひと夜もへざてんことのけりなるべきことくおぼ
さる。のこまのひしもちぬ。(春の)遊びていこう夜ふりして

もてまいれり。お納言(惟光ん)はおとなしくてたげうしう
やおぼさんとおもひやまふく心ちらひて。むすめ(お功云う女こ)の
弁(ごん)といふをよび出て。これ(惟光行)志のびてまいらせたまへ
とて。うつぶしたる後ひとりさしいれたり。たしかる
れまくらがたるまいらすべきいたひのもれまたべる。
あかりてあかたまたまどいへば。おやし(弁ん)と思へど。
あざ(弁行)なることはまぶなるもあれをとて。これは(惟光行)ま
ことまいまは。さりもじいまをぬへよりをまじ里
ゆらじといふ。けうさ(弁)人まて。氣色(けしき)もえかくおもひよ
らねば。もて(まい)来りて。れ枕(まくら)がこの中未恨(ちぎり)よりさしいれ
たる後。君(源)ぞれいのきてしたらせ給らんかし



人ハえしらぬまつとめて此ところにあらでさせ給
へるまぞしらしこさかざりの人ぞ思ひあはする
ことぐもありけれ此さらどもなどいつのまよりし
いでけん並そくいとこさらにしてもちゐ也
さ夜もことさらびいとおりしうとくの人ありお細
云ハいとかうしもやくしくこそおもひきこえ
させつれおもれまうしけるくおぼしいたらぬ
ことなきれ心ぐらへをまづうちなれぬさてもう
ちうちまの給ひをよりし世中の人もいかなりひ
つらんとさくめきあへりうくてのちうちまも院
まもおりしさ夜ままつりゐへる程ぐるまづ心なく

おもげに思しられバおやしの心やと見れなぐら
おぼさるゝまひなし取(とらく)とよりハうらめしげにおど
ろうしこそてしなひなどしれバいと(源ん)おしとおぼ
しもあれどよねこまくらの心ぐるしくて夜をや
論(つぐ)てんとおぼしわづらはるれバいと抱うくてか
やましげにのミもてなしまて世中のいとうくおぼ
ゆるほどしぐしてなん人にもこしなるべさとのミ
いへなりしてぐし給いまこゝろ(弘徽殿聖祖之)ハミくしげどの(勝月校内侍之)
なほこの大将にのミ心つけなへるをげにもてなしなし
やんごとなりつかなもうせ(菱ノ事)なひぬかをさて
もあらんになどかくちおしからんなおぼしおとゞの

我まゝいとまくしもせひこゝろしめて家ばかへも
おさくなくぞるさかしこ海へくだなずらあし
りんとまいらせさそてまらんこころ浄ねがはしく
げむ。愚心もなしたすべてのさ海まはおぼしざりしを。
くらかしとおぼせど。こて今ハことさ海まやくなか
此心もなくてたすまくかゞらりここころめて世さり。
りくて思ひさるまりたすん。人のうらこもおかまし
りなりといとくおやうくおもほしこりまさま。
彼此恩取ハいとくおし。されど海こものよのへと
されをこころんよほかるしずこころすそれぬへしぞ
しずらのやうまでこすずし我などさるへきおかるま。

もれきこえあそすう人まてハ何らんなどさすがな
ことの外にハおぼしたるさすこの姫(紫)君をいまくで
世人もそれ人ともしりきこえぬものげるさやう
なりちゝ(菅)宮にしらせきこえてしてんと覚しなりて
此もぎれこと人にあまゐくハの給ひきゐどなべて
なるめさ夜に覚しまうくる此よういなどいとあり
がたけれど女(紫)君にこゝろるりきゝとこゝきこえしなてどし
此よろげにこれにきこえてまけりしきこえしける
こそおさましき心なりけれとくやしうのにおぼし
てさやかにも見何ちを(えき)なり給ひずこきこえしにハふれ
給もくるしうけりなきもれにおぼしむきぼ

れてありしまもあらずなりまへるれありさ海を
おかしうもいとおしうもおぼされてさしごろ思ひ
ふるしし得いなく。なれバまさらぬ此乳色のうろ
うこさとくうしこ罪(きこ)給得どまらしもうへり恐
得いたちの日ハ例(れい)の院(みん)まゐり給てぞうち其実
ケどまもまゐり給。それより大殿(との)まゐりでまへり。
おとゞ(左大臣)あらしき年(とし)ともいたずむかしの此事(とし)
其罪(どもきこ)いでまてさうぐしくなるしとおぼしまま
いとかうさへつらうまへるまけれて。ひんじかへ
しまへど。こんがうくおぼしたりけらしのくさく
なけまや。もれくしきけさへそひまてありし

よりけるをこゝろにこそ給ふ(係)ち出でれるまいり給
へれば人どもめづらしうこゝ(をまり)てしのびあへぬ
口(夕霧)(係ん)こゝ(をまり)あへぬこゝろもくおよすけてれわらひ
がちにおとすけもあそれなりまこゝろつきこゝ
(とう)(ぐう)(ぐう)宮のれおるじき所なれば人まこそこゝてまつり
とゞ無れとこゝ給れ志けらひなどもかゝらず。いんそう
けのれさうそくなどれいのやうにしかけられる
ゐる女のがたならぬこそなんてさうぐしく
とゝえなれ(大宮)宮のれせうそこまてがふいうしく志
あへ志のづりをかくつくらせまつるなりなん中こ
など(さこ)冥しまひてむりしまるらひ給ふけられよそ

ひも。ほどろはいとゞ泪(なみだ)はさきりふるがりて。いろあひ
なくゆらんぞられ侍るらんと心ぬしれど。なふがり
もなほやつれさせ。ぬへとて。いうじくさしくて
ぬへるもれどもまるうさねてしそまつれしまへり。
うるしぞなふさてまいるべきとおぼしけるれ。さる
がされは。家もありざ海もよれつねなるぞうろこと
なるほ。ひ(係)なくやいとてさうへぬこぞらまし
かばくらおしうおぼされましと心ぐるしれかへり
まは。蓋やさぬるともまいゆらんぞられんはなん。
まつり侍りつれど。おもひぬへいぞうるくことゞもおほ
くて。えきこしさせ侍らず

源
あまるとしなふあらゝあしいろごろもきて
と泪(あまた)ぞふるさらすゝえしそ思ふへ志げめねと咲(きこ)
まへり此かへり
大宮
あらしき年(とし)ともいはずふるもれはふり
ぬる人のなまぶなりなりぞろかなるべきことな
ぞあらぬや

69038
6AP78